

田中宏さん

(一橋大学名誉教授)

在日外国人は日本社会の一員です

「島国根性」が骨まで染みついているのか、私たちの社会の内向き傾向は根強い。そのことが日本国籍以外の人への差別・冷遇になったりしている。そしてその状態を、あまり不思議と思わない人々が少なからずいる。日本に住む外国人の権利や地位向上のために奮闘してきた田中宏さんに登場してもらった。

この差はいつたいいなのか

——田中さんが在日外国人の問題を考えるようになってきたきっかけから聞かせてください。

一九六二(昭和三七)年から東京・駒込にあるアジア文化会館で、留学生・研修生向けの宿舍の職員になったことですね。あれが現在に至る私の原点。約十年勤めたのですが、私の一生を決めました。

すべての留学生は、指紋を押した外国人登録証を肌身離さず持つていなければなりません。あるとき台湾

からの留学生を登録証不携帯で身柄を拘束したという

電話を警察から受けたのが最初ですが、登録証を携帯していないと、そんな事態になってしまうのかと驚きました。日本社会の外国人に対する姿勢を肌で感じた瞬間ですね。それ以来です、日本在住の外国人に対する差別や冷遇といった問題に具体的に関わったのは。

六三年の十一月一日、千円札の肖像が聖徳太子から伊藤博文に代わったのですが、その日のことを、いまも鮮明に覚えています。マレーシアからの留学生にこう言われたのです。「今度の千円札に、どうして朝鮮民族の恨みを買ってハルビンで殺された伊藤博文なん

かが出てきたのですか？ 日本に住むいちはん多い外国人は朝鮮人なのに、日本は残酷なことをしますね」。

日本が戦争中に占領していた国から来た留学生たちと、当時の私は年齢があまり変わらず、生年がまったく同じ青年もいました。私は国民学校三年で敗戦を迎えていますから、戦時中の雰囲気はおおよそ知っています。一方、彼らは彼らで、日本の占領時代を体験している。もしくは周囲の大人から話を聞いている。つ

まりアジア文化会館にいた私と彼らは、日本の軍国主義を別なカたちであれ、体験している者同士だったわけです。それなのに新しい千円札を見て何も感じなかった私と、疑問や反感を感じる彼らがいた。この差違いはいつたいいなのか。心底考えさせられました。

——歴史認識のギャップをいやおうなく感じさせられたわけですね。

東大の博士課程にいたベトナムの留学生からは、「東大はエリートの大大学といわれているが、彼らはまったく歴史を知らない。これだけ日本語ができる僕を相手に、わざわざフランス語で話しかけてくる。彼らは、ベトナム人にとってフランス語が屈辱の言語だということを知らないのだろうか」と言われたこともあります。彼はその後、日本共産党の機関紙「赤旗」に載った、フランス語講習会の広告を見せにきました。主催は日本ベトナム友好協会で、キャッチフレーズは「インドシナ三国で普及しているフランス語を学んで、インドシナ人民と友好を」。そして「日本の最左翼も、落ちるところまで落ちた」と笑っていました。

この広告は、七三年の十月三十一日と十一月七日の二回「赤旗」に載りました。当時はまだベトナム戦争



●たなか・ひろし 1937年生まれ。岡山県出身。東京外国語大学中国学科卒業、一橋大学大学院経済学研究科修士課程修了(東洋経済史専攻)。専門は日本とアジアの関係や在日外国人問題など。著書に『在日外国人 法の壁、心の溝』(岩波書店)、共著に『グローバル時代の日本社会と国籍』(明石書店)、編著に『日韓新たな始まりのための20章』(岩波書店)など。